

平成 29 年度第 2 回横浜環境活動賞審査委員会 会議録	
日 時	平成 30 年 2 月 23 日 (金) 13 時 00 分～16 時 40 分
開 催 場 所	関内中央ビル 10 階大会議室
出 席 者	戸川孝則委員長、北村亘委員、磯崎保和委員、川崎あや委員、川村久美子委員、為崎緑委員
欠 席 者	湯川之委員
開 催 形 態	公開 (傍聴者なし)
議 題	1 委員長の選定及び職務代理者の指名 2 応募者プレゼンテーション及び審査 3 生物多様性特別賞審査 4 第 25 回横浜環境活動賞受賞候補者の決定
決 定 事 項	1 委員長に戸川孝則委員、委員長職務代理者に北村亘委員が選任された。  2 以下の団体が、第 25 回横浜環境活動賞受賞候補者として決定した。 (1) 市民の部 ア 大賞 横浜市地球温暖化対策推進協議会 イ 実践賞 熊野の森もろおかスタイル 笹下川再生プロジェクト 南中あじさい咲かせ隊 横浜海の公園ライフセービングクラブ 緑園地区活性化委員会 緑園子ども見守りプロジェクト (2) 企業の部 ア 大賞 株式会社ファンケル イ 実践賞 株式会社アペックス 京浜東海支社 (3) 児童・生徒・学生の部 ア 大賞 横浜市立三保小学校 イ 実践賞 明治学院大学横浜キャンパス ヤギ除草システムプロジェクト (4) 生物多様性特別賞 笹下川再生プロジェクト
議 事	<b>1 委員長の選定及び職務代理者の指名</b> (事務局) これより議事に入ります。委員長が会議の議長として議事を進めることとなっておりますが、委員長が選任されるまで事務局が進めさせていただきます。では、運営要綱第 3 条第 1 項により、委員の皆様の互選により、委員長をお選びいただきます。ご推薦がありましたら、お願いいたします。 (北村委員) 戸川委員を推薦します。

(委員) 異議なし

(事務局) ご推薦がありました、戸川委員いかがでしょうか。

(戸川委員) 了承

(事務局) では、戸川委員に委員長をお願いします。続きまして、運営要綱第3条第3項により、戸川委員長より、職務代理者のご指名をお願いいたします。

(戸川委員) 北村委員にお願いしたい。

(北村委員) 了承

(事務局) では、北村委員に委員長の職務代理者をお願いいたします。要綱の規定により、審査委員会の議長は委員長になっておりますので、以降の議事進行を、戸川委員長よろしくをお願いいたします。

## 2 応募者プレゼンテーション及び審査

(戸川委員長) プレゼンテーション及び審査の進め方について、事務局から説明をお願いします。

(事務局) これより、応募者の皆様にプレゼンテーションを行っていただきます。プレゼンテーション終了後、質疑応答、意見交換を行います。プレゼンテーションは、児童・生徒・学生の部、企業の部、市民の部の順に行います。審査委員の皆様は、意見交換の後、お手元の事前採点表の点数を修正してください。点数の変更がない場合は、そのまま結構です。採点表は、各部門の審査が終わるごとに、事務局で集め、集計します。25点満点中平均点15点以上を実践賞の候補者とし、最高得点を大賞の候補者とします。生物多様性特別賞については、事前審査にて各委員1者を推薦していただいています。推薦のあった応募者について討議し、討議内容を踏まえ、再度ふさわしいと考えられる応募者を1者、選んでいただきます。次に、プレゼンテーション及び質疑応答の流れについて説明いたします。時間は3分間です。2分経過時に予鈴、3分で本鈴を鳴らします。発表後、審査委員の皆様から質問をお願いします。質疑応答の時間は5分間です。4分経過で予鈴、5分で本鈴を鳴らします。質疑応答終了後、発表者の方はすみやかに自席にお戻りください。委員の皆様には意見交換を行っていただきます。プレゼンテーションはパワーポイント等パソコンソフトの使用や追加資料の配付はできません。活動内容を紹介する写真や、工作物等を手に持って審査委員に提示することはできません。プレゼンテーション、質疑応答は、時間厳守をお願いいたします。事務局からの説明は、以上です。

(戸川委員長) 今の説明に対し、審査委員の皆様、応募者の皆様、何かご質問がありますでしょうか。ないようですので、プレゼンテーションを始めたいと思います。なお、本日、湯川委員がご欠席ですが、書類による事前審査で採点いただいた点数を湯川委員の点数として集計するという点でよろしいでしょうか。

(委員) 異議なし

### (1) 児童・生徒・学生の部

#### 横浜市立三保小学校

##### <プレゼンテーション>

私達の学校は児童数が1,000人を超え、横浜市でも有数の大きな学校で、中山駅から少し山側のところにあります。今回の活動の始まりは、平成23年度に、6年生の総合の学習で、非常に豊かな地域資源を学習に活かさないかということで、「未来に

残そう町の自然」という取組を始めました。自然の豊かな梅田川のことを調べたり、子どもたちが現地で調べた町の素晴らしさを在校生に紹介するというような活動、また子どもたちの一年の活動を「こどもエコフォーラム」で発表する等を行っていました。次の24年度になって、子どもたちから、こんなにたくさん自然があるのならば、写真に撮ったらいいのではという話が出ました。そうした子どもの考えを基に、写真の撮影が始まりました。子どもたちからは、卒業式にみんなで撮った写真で体育館をいっぱいにしたいとか、町に展示したら興味を持って三保の町を訪れてくれるんじゃないか、というような意見もあり、全員で写真を撮りためました。今年子どもたちが撮って、エコフォーラムで発表した写真は、今は地区センターに掲示してあり、今週いっぱいそちらで166人分の写真が展示されています。また、子どもたちが、緑区で写真の募集をしているよと、広報紙を持ってきてくれて、それでそちらにも応募することになりました。写真を撮るのは子どもたちで、自分達で行って、何百枚と撮る子どもや、3回も4回もお休みの日に撮って来る子どもたちがいっぱいいました。それから毎年写真展に応募して、子どもたちは手作りのチラシを作って警察へ行って許可を取り、自分たちで宣伝活動をしました。このように、子どもたちには地域自然の豊かさや、生物多様性に気づいてもらいたいと思い平成24年から継続的に取り組んでおります。

#### <質疑応答>

(為崎委員) 書面での質問で、先生方の指導の程度をご質問したところ、他の学年の活動はカリキュラムにあるとのご回答があり、6年生の地域自然の写真活動は違う位置付けということのようでした。その6年生の写真活動は学校全体ではどのような位置付けになるのかということと、カリキュラムの中に位置付けられないとなると、先生や生徒が変わっていく中で、今後の継続性をどう確保されていくのか、お聞きしたいです。

(応募者) 6年生の総合的な学習の時間「我がまち ふるさと 三保」で、地域の良さを発表するというカリキュラムがあります。この6年生の写真活動は、総合的な学習の時間がきっかけですが、写真を撮る活動は、子どもたちの自主的な活動で、学校はそれをまとめてプリントアウトしたり、区役所に応募用紙を出す等の手伝いをします。自分たちの町の良さを自分たちの学校の後輩や保護者、町の人に紹介するという活動をカリキュラムと連動してやっています。また、他の学年では、近くの畑で採れたものを地産地消ということで給食で食べたりする等、カリキュラムとして作っており、継続性をもってやっております。

(為崎委員) 写真活動の、今後の継続性というのはどうでしょうか。

(応募者) 基本的には、プリントアウトするのに結構インク代等がかかるので、日産財団等に支援していただいたりしています。今後続けていくのに若干のお金がかかりますが、そんな莫大な予算ではないので、やっていけると思っています。

(川崎委員) 今のお話を聞きますと、他にいろいろな環境活動カリキュラムがあるけれども、この写真活動は児童の自主的な取組なので、これに特化して応募したという風に受け止めました。自主的にやられている6年生の方たちは今回この環境活動賞に応募するというのを知っていますか。

(応募者) 多分、知らないと思います。フォトコンテストに出すことは知っています。

今年のフォトコンテストのチラシには、子どもが撮って入賞した作品などが一部使われており、それが区役所で配られているので、子ども達は頑張ると、区のフォトコンテストで入賞して、そうすると区役所のホールに半年ぐらい飾ってもらえるということは知っています。

(川崎委員) 今後の写真活動の運営の仕方、今後、続けていくためにはどうでしょうか、というようなことを子どもたちと一緒に話し合うというようなことはないのでしょうか。

(応募者) 6年生の写真を次の5年生に見せると、5年生たちが僕たちも写真を撮りたい、という風になります。そういったところで継続性を持たせていきます。

(川村委員) 児童が、自分自身で写真を撮ることによって、どんな風に変わるのかというところは、どういう風に今後、あるいはこれまで評価されてきたのでしょうか。

(応募者) 今まで知らなかった場所や目がいかなかったところに、ファインダー越しに目が行くようになります。また、どうにかして伝えたいというのがあって、はいつくばって撮ったりして、自分たちの写真で伝えるのですが、結局は自分たちで町の良さを再確認できているというところが一番変化としてありました。

(川村委員) それは何らかの形で本人に書かせるなどすると良いかもしれません。

#### <意見交換>

(北村委員) すごくきれいな写真が撮られているのを実際に見て、すごく良いと思ったのですが、個人的には、もう少しやっていただけたらと思います。6年生だけではなくて、もっと下の学年の子たちもやり始めたら面白いのではないかと思います。それこそ1年生の視点と6年生の視点が違うので、もっと学校全体で位置づけを作るような仕組みになっていくと、もっと素晴らしいものになるのではないかと思います。

(戸川委員長) 写真を私も見ましたが、素晴らしいですね。視点が面白いです。大人が持っている目線じゃ撮れないような写真が出てくると面白いのだと思います。活用をもっと広げて、地域に発信ができればさらに良いと感じます。

(為崎委員) 子どもたちの発案から新しいことが起きたのは素晴らしいと思います。先ほど川崎委員がご質問された運用のところというのは、学校が主導ではなくて、撮った写真をどうするかとか、今後の活動をどうするかというあたり、トータルで巻きこんでいただけると、もっと子どもの自発性が出て素晴らしい活動になるのではないかと思います。

(川村委員) 先ほどの続きですが、やはり写真だけではなくて、子どもが自主的にやっていることが、外にも聞こえてくるような形にしていいただければ、なお良いかと思えます。

#### <採点>

(川崎委員) 6年生が行っている写真の紹介活動に絞って点数をつけるのか、あるいはこの学校のいろいろな学年でいろいろな地域の活動をカリキュラムとしてやっていることを含めて採点するのかで、点数が違ってきてしまうので迷っています。

(事務局) 学校の授業で取り組む活動は、活動賞の対象になりません。ですから、採

点する活動は写真に限っていただきたいのですが、小学校全体の取組がこの活動の背景にあるということをご指摘のとおりです。

## 明治学院大学横浜キャンパス ヤギ除草システムプロジェクト

### <プレゼンテーション>

まず、私たちヤギ部が発足した経緯をご説明します。一番のきっかけは、本学にエコや環境に対し興味を持っている学生の存在でした。同時にこちらの航空写真をご覧いただきますとわかるように、横浜キャンパスがこのように緑が多く自然が豊かなところに立地しているという特徴から、このような校内で行うことができるエコキャンパスプロジェクトの具体例として、ヤギによる除草活動が発案されていました。このようにしてエコに関心を持った学生そして大学が導入を検討していたヤギ除草といった2つの事実をつなぐ存在としてヤギ部は誕生しました。そうしたヤギ除草活動は、本来の目的や効果としては、除草機、除草剤を使わない安心・安全な除草を行うといったことが挙げられます。事実、この写真を見ていただくとわかるように、ヤギを用いることによって環境に優しい除草が可能であることが、お分かりいただけるかと思います。しかし、それだけではない効果として横浜キャンパス主催の戸塚まつりにいらっしゃるお客様や他の学生、また市民の方々など様々な人々に、エコに関心を持った学生が語りかけることによって、このヤギの存在自体が他の人、周りに対してエコへの関心の輪を広めていくことができるといった広報や啓発の効果も表れているというのが、私たちの大きな発見でした。そこで私たちは広報の一環として、このようなヤギペーパーと呼ばれる広告・資料も作成しました。今、私たちが着ているシャツやジャンパーは、広報の一環として作成しました。このようにして先ほどお見せした図をもう一度見ていただくと、学生の持つエコへの関心がヤギを用いた除草への取組として具体化され、その存在ややり方がオリジナリティや癒しにつながり、そしてその影響を受けた他の人々がエコに関心を持つようになり、さらなるエコ活動への第一歩として広がっていくというサイクルを生み出すことが可能になっています。こうした活動を通して私たちヤギ部は、今後も向上心と意欲とを持って、このエコへのサイクルをつなげていきたいと強く考えております。

### <質疑応答>

(磯崎委員) ヤギは、キャンパスですずっと育てて、飼っていくのですか。

(応募者) 一頭のヤギをいつまでも育てるのではなく、有限会社アルファグリーンさんというところからご協力をいただいて、除草に適した年齢のヤギを一年交代でレンタルしているという形をとっています。

(磯崎委員) そのヤギの管理ですが、やはり動物ですから、匂いや声など、迷惑をかけるようなことはありませんか。

(応募者) もちろん課題としては鳴き声が騒音の一つとなってしまうたり、やはり糞尿の匂いというのがもしかして課題としてあるのかもしれませんが、やはりそこは緑が多く自然が豊かな大きな校内であるので、そこまで目立つこともなく、これまで学生や職員の方々からクレームなどはいただいたことはないです。

(戸川委員長) 私も実は戸塚まつりに行ったことがあり、歩いていてヤギがいたのですごく驚いた思い出がありますが、確かにそんなに匂いなどは感じませんでし

た。

(北村委員) 面白い取組で個人的にはすごく楽しいのですが、気になるところがあります。アルファグリーンさんにレンタルということで、随分とお金がかかっているようなのですが、その辺のお金がどうやってまわっているのかということと、今後もレンタルを続けていくのかということです。せつくなので、できたらヤギを繁殖させることなどやれるようになってくると、もっともっと面白いんじゃないかという風に思っているところです。今後の継続性も含めて何か次のアイデアがあれば教えてください。

(応募者) やはり、学生発のやり方と言っても、学生だけでは回らないお金の面に関しては、大学から少し協力をいただいています。また、年度末にいつも大学へヤギ部の活動報告を出しているのですが、昨年度は大学から最高評価をいただきました。予算的な面に関しても、大学から補助をいただけるようになっていますので、今後のレンタル料に関しては、そこまで心配はないかと思えます。繁殖というのは、他の人々に興味・関心を持ってもらう手段としては良いかと思われま。専門性も必要になってくると思えますので、アルファグリーンさんや湘南ヤギの里さんなど、ご協力いただいている方々と相談をしつつ、これからもしできるのであれば、検討していきたいと思えます。

(北村委員) アルファグリーンさんの考えたことをそのままやっているというだけになってしまわないような、新しい学生ならではの工夫があったら良いかと思いました。

(為崎委員) 今のコメントにすごく重なるのですが、生き物の大切さとか触れ合いみたいなものについては、皆さんの思いがとても伝わってきたのですけれども、一方で環境にどういう風がいいかというところは、添付されている資料もアルファグリーンさんのホームページが添付されていたり、また投げかけられた質問でも、アルファグリーンさんはこういう風に言っていますという風なコメントでしたので、環境に与える効果とか、そういったところを皆さんたち大学生の言葉でもう一つかみ砕いて伝えるところがあると良いかと思いました。先ほど、おっしゃっていた、ヤギを見てくださる方に直接説明する際の言葉は、マニュアルを作ったり、皆さんで学び合ったりするのでしょうか。

(応募者) アルファグリーンさんからレクチャーいただいたことをそのまま伝えるのではなく、大学生がしっかりと聞いたことを反芻して自分の言葉で伝えることを意識しています。ですから、アルファグリーンさんから教えていただいたことを直接伝えるわけではありません。また、戸塚祭りの他にも、オープンキャンパスなどでもヤギ部の紹介をしていますが、今ここに立っているように、他の人に大きな声で、自分の言葉で伝えることを意識しています。

#### <意見交換>

(為崎委員) 大学生、大学、アルファグリーンさんという三者がからんだプロジェクトなので、その辺の理解、整理が難しいかと思えますが、一つが今大学の予算を組んでいるから、大丈夫だという話がありましたけれども、逆に大学の方針でこれをやめるとなると大学の予算がつかなくなると、どうなるのかというあたりが気になるのと、アルファグリーンさんとの連携の中で今、ご自身たちの言葉でと

いう風におっしゃったのですが、やはりヤギを飼う上で、その延長線上に環境に  
どういふ良いことがあって、それが他の大学生にも伝わって行動に移っていくと  
いったような、そういった流れが今後できていくと良いという風に感じました。

(川村委員) 私も似た意見なんです、ヤギを接点として、ヤギ部の学生とそれ以外  
の多くの学生とのコミュニケーションがどういふ風に変わっていくのかとか、そ  
ういったことも含めて、今後、環境や生物に対しての理解がどういふ風に変わっ  
ていくのかというところを、ちゃんと記録を残すなりしていくことが重要ではな  
いかと思いました。

(川崎委員) 北村先生は、環境ビジネスなどお詳しいと思うんですが、何を使ってと  
いうのが、今の環境問題の中でどういふ位置づけで考えればいいのか、それから  
ヤギは、環境問題に対して、人間のパートナーなのか、いわゆる除草の道具なの  
か、という点が気になっています。いわゆるレンタルは、自分たちで育てて死ぬ  
まで看取る中でパートナーではないような気がします。その辺が、このアルフ  
ァグリーンさんの考え方も含めて、少しわからないので、もしご存知だったら教  
えていただけませんか。

(北村委員) 私もアルファグリーンさんの理念等まで詳しいというわけではないので  
すが、以前ヤギの除草ができないか、と私のキャンパスで検討したことがありま  
した。その際に調べましたら、やはりレンタルでやっている以上、どうしてもビ  
ジネス的な側面はあるという風に感じました。その上で、やはりヤギを使うとい  
うことで、プラスアルファの効果が出てこない限り、これだけ予算を使っていると、  
逆に言うと学生に草刈りに来てもらって、バイト代を渡した方が、これより  
も安くなるんです。そしてその方が除草するということだとか、そういったこと  
の学ぶ機会になると思うんです。そういう意味でいうと、今のままだと企業の利  
益追求に乗っかっているようなイメージがあるので、プラスアルファの部分がや  
はり欲しいというのが個人的な印象です。それが繁殖させたりといったような新  
たなステップというのは面白いのではないかと思います。

(戸川委員長) 今回のプレゼンテーションでは、アウトプットは出ているんですが、  
ヤギを活用しているからこそこうなるんです、というアウトカムとしてのその後  
の影響というものが出てこなかったんで、そこをきちんと示せていたらもっと良か  
ったのではないかと思います。

<採点>

## (2) 企業の部

### 株式会社アペックス 京浜東海支社

#### <プレゼンテーション>

私どもは自動販売機の会社で、今年で創業 55 周年になります。2015 年度より横浜  
市環境創造局主催の「よこはま森の楽校」において協賛をしており、今後も進めてい  
きたいと考えております。今年度初めての取組として、横浜市資源リサイクル事業協  
同組合が主催する環境絵日記展に参加し、地域企業賞ということで、我々支社全員で  
投票し、若葉台地区の小学生を表彰しました。また、市立さわの里小学校において、  
出前授業を行いました。当社でも初めての試みでしたが、間伐材の紙カップや災害対

応型の紙カップ式の自動販売機を体育館の方に持ち込み、環境と防災の2つをテーマに授業を行いました。紙カップ式自動販売機への驚きや、我々の自動販売機のお湯を使って非常食のアルファ化米を食べたときの感動などを生徒さんなりに理解して、その後地域の方々向けに学習発表会を独自でやられており、我々の出前授業によってそういった活動につなげることができたのだと思っています。また、昨年11月の森の楽校では、さわの里小学校の皆さんが、出前授業などの学習で学んだ間伐の大切さや、健全な森を育てようというテーマで、パネル展示をいたしました。その他、自然観察の森において、外来種の木を伐採するという活動を行っておりまして、これからもこういった活動を続けていきたいと思っております。

#### <質疑応答>

(為崎委員) リサイクルのデザインをされた紙カップの取組が面白いと思いました。

この紙カップに間伐材を使うことと、リサイクルのデザインは御社が提案をされて、実際に紙カップを作っているのは別会社ということでもよろしいでしょうか。

(応募者) はい、私どもは、自動販売機のオペレーターなので、自動販売機を設置して中身商品を販売します。紙カップを作っている容器会社があって、その上には製紙会社があります。ただ、自動販売機で使うカップというのは、市販されているカップより少しややこしくて、例えば機械の中でちゃんと落下するかや、重ね合わせる時に効率よく重ね合わせられるか等、いろいろと条件があるので、メーカーとしては、うまくいってるのであれば、今のまま変えたくない、というのが通常です。そこで私どもは5年間も、しつこく間伐材を使おうと言い続け、やっぱり間伐材を使うのは難しいよと言われても、それでも言い続けました。その結果、やっと容器メーカーから、製紙会社に働きかけていただけるようになり、製紙会社はあまりうんと言っていただけなのですが、そこに働きかけて、本来なら上から下に降りてくるという流れのところ、今回逆の方から働きかけて、容器もデザインも私共の方でやっております。

(為崎委員) 恐らく、間伐材を使う方がコスト高になると思うんですが、それに関して、今、おっしゃられた川上の方ですね、そこから継続は無理だよとかそういう声はなく順調に今後も継続していく見通しでしょうか。

(応募者) まず、私どもは間伐材100%で作りたいんですが、やはり、安定供給の間伐材を組み入れる場合、10%の配合が固いと言われているところから、安定供給の道を取っています。コストに関しましては、社内でやはり懸念する声もありましたが、全社としてこれからカップを売っていくのであれば、ここに力を入れていきたいというトップの思いもありまして、会社を動かすことに成功しました。将来的には、もっと普及したら、価格も多少こなれてくるのではないかと思います。私どもとしては今のところそのコストアップ分に関して、それと同じタイミングで社内用の封筒や、名刺など一切、間伐材のものにしていますが、継続して今後も使っていく予定です。

(川崎委員) 提出いただいた資料には間伐材を含む国産材100%の紙カップの使用を開始したとありますが、今、おっしゃた、100%ではない、というのはどういう意味でしょうか。

(戸川委員長) 材料としては、国産材を100%使っていて、その中に、必ず間伐材を



10%以上は入れている、ということですね。すごく良い取組だと思いますので、長く続いて欲しいと思います。エンドユーザーの消費者までメッセージが届く取組というのは、なかなか難しいと思います。小学校での出前授業がその一つかと思いますが、そういった取組があればお聞かせください。

(応募者) はい。私どもウッドデザイン賞というのをいただいたのですが、それは団体のメッセージが、年間約4億人の方に届けられているというところが評価されました。ただ、その評価について、数値で表すのは非常に難しいところです。ただ、出前授業や、環境エコセミナーを実施して、お話をさせていただいているのですが、その際にお声として非常にいいね、とか、紙カップを持ち帰って子どもに話すわとか、子どもの学校でそういう授業を取り入れたいわといったお声というのはいただいています。

#### <意見交換>

(北村委員) すごくユニークな取組で面白い取組と思っていますが、実はこの森の楽校というイベントに私の研究室も参加してまして、そこでアペックスさんの担当者さんとお話したことがあります。その際に、間伐材の紙カップを使っているというお話をお聞きしたのですが、なぜかそこで花の種を配布しておられて、逆にそこは、間伐材の紙カップと有機豆のコーヒーを配った方がもっと理解が深まるのではないのかと思いました。やはりこのCSR活動というのは、まさに企業ができることをやっていくということで、花の種を配るといったことではなく、もっと会社のいいところをアピールしていくような仕組みで、いい取組をもっと知ってもらえるようにできるのではないかと思います。

(戸川委員長) 製紙メーカーさんの考え方を改めて、コンセンサスを取るのなかなか大変だと思いますので、よくできたなと思います。せっかくなので、そのカップを持った人が、何か物語を感じるような仕組みが作れると、もっと面白くなると思います。一年間に発信するメッセージの数がすごい数なので、なかなかできたものではないと思います。

(為崎委員) 私も多分、ユーザーとして、アペックスの自動販売機をよく使っているのですが、今回ここまで環境にこだわって徹底してやってらっしゃるということは存じ上げなかったのもったいないという風に思いました。提出された資料を拝見しても、姿勢として非常に徹底していると思いますので、今、委員長がおっしゃられたように、それが一般の人に伝わるような発信をどんどんされていくと良いと思いました。

#### <採点>

### 株式会社ファンケル

#### <プレゼンテーション>

ファンケルのビジネスの原点は世の中の「不」の解消です。食品ロスという世の中の「不」を解消するためのファンケルの取組をご紹介します。食品ロスとは、まだ食べられるのに捨てられてしまう食品のことです。世界では8人に1人が飢餓で苦しんでいます。今後世界の人口が増え続けるために食糧不足が心配されます。一方、日本では食料の6割を海外から輸入しています。そのような中、年間632万トンもの食品

が捨てられています。しかも半分は家庭から出たごみで、残りの半分は食品会社、小売、飲食店などの企業ごみです。実は、企業から出る野菜や穀物くずには、病気を予防するなどまだまだ知られていない成分があります。そこで、日本の精米で捨てられている 55 万トンの糠、胚芽に着目しました。もともとは、玄米は調理しにくく、消化吸収しにくいという課題がありました。そこでファンケルは、玄米を研ぎ洗いしながら、発芽させ、糠を柔らかくして吸収しやすくして、炊飯器でも炊けるようにしました。発芽させることで、血管のつまりを予防することもわかりました。これにより年間、500 トンの糠や胚芽の企業ごみを減らしました。また、玄米の受け入れ検査で選別機にかけると形や色が規格外の屑米や糠が約 2 トン発生します。それらも鳥の餌として有効に活用しています。販売でもお客様の食品ロスを削減するために、利用しやすい予約サービスや、定期お届けサービスに努めています。また、送料無料の無期限返品保証制度で、年間 2 トンの食品戻りがあります。返品理由を調べますと、4 割が必要以上の注文でした。そこで、無駄な商品をお届けしないように、発送前の事前確認をしました。それにより 400 キロの商品を減らし、そのコスト削減分をお客様に割引還元という形ですることができました。また、毎年開催していますシニアゴルフイベントの収益やチャリティー募金を WFP に寄付し、腹ペコで学校に通う世界の子どもたちの給食に活用しています。昨年からで約 34 万人の子どもたちの給食を届けました。ファンケルの経営理念は、「もっと何かできるはず」です。国連の SDGs の目標 2030 年度までに食品ロスを半減するために、さらに取り組んでまいります。

#### <質疑応答>

(磯崎委員) 御社は、無添加の、あまり肥料をあげないで野菜なんかをお作りになっていますが、これからどうなりますか。

(応募者) 弊社では、ケールで青汁という商品を販売させていただいて、これは愛媛県で元々みかんなど作物をやっている地域で化学農薬を使わない栽培をお願いしています。また、肥料ですが、化学肥料等をやりすぎないように、土壌成分を分析していただいて、必要な肥料だけを加えるという形で栽培されたケールを弊社で仕入れて生産するという形をとっています。

(川村委員) 例えば二酸化炭素削減への取組について家族ぐるみの褒賞金を出すというプログラム等、いろいろ面白い取組をされていて、そういう意味でいろいろな環境保全に対するアイデアがうまく社内に出てきてそれを取り上げていると思うのですが、社内でこういったアイデアを取り上げていく仕組みがあるのでしょうか。

(応募者) 「家庭と会社でエコプログラム」というプログラムがありまして、まず社員のご自分の家庭の中でエコに取り組んでいただいて、電気やガス、水道の節電目標を達成したら褒賞金を出し、その代わりにアイデアをくださいという、プログラムをやらしていただいています。それでアイデアを集めて、いいものに関しては、褒賞金を出し、それを社内報や web 上に載せて、社内で活用するという形で、それをまた社の節電やエコ活動にうまく活用させていただいています。

(為崎委員) ちょっと意地悪な言い方になってしまいますが、褒賞金を出すという金銭的な動機付けだと、お金のためにやるみたいな形になってしまわないかという感想をもちました。企業全体の取組でも、ロスをなくすということは、収益アッ

プにつながりますが、社員さんの間に収益アップだけではなく、環境にも非常に貢献をしているんだという意識づけのようなところ、家庭とその社員さんとやっていることが全部環境にプラスなんだということの意識づけみたいなのをどのように工夫されていますか。

(応募者) 意識づけということでは、社内のイントラネットですとか、そういうものをまず共有するとか、また家庭でのエコプログラム自体も、今お金のためとおっしゃいましたが、ハードルが高いので、お金のためだけではなかなか挑めないということもあり、そこで社内報、それからイントラネットなど、そういった形で広く社内に知らせているというのが今の現状でございます。

#### <意見交換>

(戸川委員長) ものすごく微に入り細に入りでやっているという印象があります。例えば青汁もそうですし、お届け再配達をゼロにする取組もそうですが、それがうまくいくとまた次もモチベーションが作れるような取組はどうやったらできるのかというのは、すごく興味があります。

(北村委員) 時間が足りなくて質問できなかったのですが、食品の部分で随分とたくさんサービスの挙げられているのがわかりましたが、他の部分、化粧品や医薬部外品などのところは、食品よりも環境配慮が難しいイメージがありますので、どんなことをされているのか聞いてみたかったです。

(磯崎委員) ファンケルさんは地域と深い交流があり、例えば、栄区に工場があるんですが、非常に生産者、農家の人と交流をしていろいろな推進をやられています。さらに発展させていただきたいと思います。

#### <採点>

### (2) 市民の部

#### 横浜海の公園ライフセービングクラブ

#### <プレゼンテーション>

(応募者) 我々は海の安全活動が中心の活動ですので、環境活動賞というところですが、我々が水辺で活動している中で、海辺での環境について我々の姿勢を見ていただきたいと思ひまして、ご説明させていただきます。私もは、横浜市唯一の海水浴場を持つ海の公園の監視所を母体として実質 30 年前にできた団体です。横浜の海辺で海の環境を見ながら、主な活動としては水辺の安全活動となりますが、同時にビーチクリーンを通じて環境に関する活動も行っています。まず、我々がキーワードとしていつも言うのは、140 キロ、14 キロ、1.4 キロという数字です。これは何かと言いますと、横浜総海岸線 140 キロ、それから人々が身近に近寄れる海岸線が 14 キロ、そして海浜としては 1.4 キロしかないということです。これを市民一人あたりにしますと、総海岸線としては、37.5 ミリ、そして近寄れる海岸線として 3.75 ミリ、そして市民一人あたりの砂浜は 0.37 ミリしかありません。ですから、こういった数字を見ながら、市民の皆さんには、海岸線を守る 4 ミリの、そして砂浜を守る 0.4 ミリの活動をぜひして欲しいということを中心にビーチクリーン活動を通じて訴えかけています。海の公園自体は、様々な海辺のレクリエーションを楽しむ場として、造成された場

所です。もともと貝が採れ、海水浴が盛んな場所だったのですが、改めて広い砂浜が造成されました。里海の定義は環境省などが書いていますが、人手が加わり、生物多様性が向上した沿岸海域ということです。そして、その定義で言うと、海の公園は横浜の里海なのだということです。これは、平成4年の頃、海の公園に一日3万人、5万人という潮干狩り客がいた時の写真です。経年で見ていきますと、アサリの数はどんどん減っていています。これは乱獲も含めていろいろと問題があります。また、環境保護団体が海の中をきれいにするためにアマモを植えました。アマモを一生懸命植えたんですが、残念ながら今、繁茂しすぎています。海水浴場の約3分の2がアマモだらけになってしまいました。

#### <質疑応答>

(北村委員) ライフセービング団体さんがどういう経緯で環境活動を始めるようになったかということが一番気になっている点です。環境保護を目的とした団体ではないのに、自分たちのところから新しい環境活動を始めていくようになったことが素晴らしいことだと思いますので、なぜそういう風に思いついたのかというところがあると、他の団体の方たちも取り組みやすいのではないかと思います。

(応募者) ありがとうございます。最前線でお客さんと接している中で、ゴミがどんどん増えてきていたり、問題に直面してしまっていて、直にお客様から苦情を受ける立場です。そのような中で一番思うのは、例えばゴミに関しては、拾うばかりでなかなか終わらないというか、拾うだけの活動から拾わなくてもいいような活動をしていこうということで我々がやっていますライフセービングの子ども向けのジュニアライフセービング教室などといったものを通じて子どもたちに環境について学んでもらっています。また、実験等、経験を通じて学ぶような座学を通じて子どもたちに伝えるような活動をライフセービング活動の中に組み入れて活動しています。

(為崎委員) ライフセーバーの方でも、ビーチクリーンに参加した方でもいいのですが、海をきれいにするというだけではなく、環境って大事だよ、ということで、それ以外の行動にもなにか変化が起きたという、そういう事例があったら教えてくださいませんか。

(応募者) 我々の発案ではないんですけども、同じような気持ちから今、一緒に動いている活動があります。海水浴場の前にアマモが多くなってくると、これを刈ります。刈ったらそのまま捨てるのではなく、近くの畑でそれを肥料にしています。それでできたミカンを使ってドレッシングができて、今年、神奈川なでしこブランドになりました。このように、いらなくなった未利用な海藻なども利用できることを紹介していく中で、このような活動が生まれ、新しい商品ができ、未利用の海藻の活用につながっています。

(為崎委員) ちなみにそのドレッシングはどこが作られていらっしゃるんですか。

(応募者) これは、2014年の地産地消ビジネス創出支援事業という横浜市が支援している事業でできて、それが今年ブランドになりました。個人の方が会社をやられています。

(為崎委員) 継続的に販売されているんですか。

(応募者) はい、現在も販売されています。

(為崎委員) その時にアマモがずっと使われているんですか？

(応募者) そうです。ミカンの木の根元に刈ったのを置いて肥料にします。

(磯崎委員) 津波などの災害に対して、これからどういう対応されますか。

(応募者) 鎌倉や茅ヶ崎と比べますと背後に山がありますので、そちらの方に早く誘導できるようにオレンジフラッグという活動を行っています。鎌倉で生まれた活動で、沖の人にもわかるようにオレンジフラッグを掲げて、津波が来たよとサインを出して、すぐにライフセーバーが率先避難者となって、山の方に誘導します。

(川崎委員) 事前に質問した際に、各団体とはあまり積極的に交流していないとあり、あまり交流する気がないのかなと思っていたのですが、今のアマモの問題など、他のところや自分たちがやってきたことの知恵を、交流させる、分け与えるようなこともされているんですね。

(応募者) 書き方が悪かったのですが、全く交流しないわけではなく、他の団体と共通理念があれば、一緒にやりましょうということで、一生懸命交流して、やってきています。

#### <意見交換>

(戸川委員長) 先ほど、ライフセービングのチームだから、環境にアプローチするのはちょっとおこがましいみたいな話がありましたが、逆にそういう団体だからこそ、それがすごく素晴らしいと思います。環境というのは、どんな活動をやっている、どんな団体にでも関係があるという、モデルとしてはいい事例になると感じています。

(川村委員) そういう意味で少し、理解が難しかったという面もあると思います。今までの会員というのが、監視員を経験した人であり、毎年10人ぐらい入会するというので、やはりライフセービングに限定されているので、もっと会員を環境にも興味があるような方々にも幅を広げていくことを今後やられてもいいかと思っています。

(川崎委員) 環境を目的にした団体を立ち上げたら、そこに集まってくるのは、環境にもともと関心がある方々なので、むしろ、他の事に関心があって集まってきた人たちが、自然と環境にも興味を持つようになるということが大切だと思います。環境をもともと目的としていない企業さんは、いかに環境に配慮した活動をしているかということで、企業の部さんはたくさん出てきてらっしゃるので、そういう意味では、市民の部も、そういう時代になってきていて、その先駆的な事例だと思いました。

#### <採点>

### 熊野の森もろおかスタイル

#### <プレゼンテーション>

港北区の大倉山を中心に自然エネルギーの普及と自然に寄り添う暮らしの心地よさをテーマに活動しています。大倉山は横浜に近い都心部にありながら、神社をめぐる鎮守の森が広がり、起伏に富んだ谷戸や、畑など、里山の風景が今もなお残る地域です。私たちの活動は、環境保全や省エネにつながる普及啓発だけではなく、地域に一步深く関わることで、歴史や風情、地形などを理解して、今住んでいる人たちの関

わりや地球を思う気持ちを大切にしていこうということを普及したいと考えています。なぜなら、活動のきっかけになったのは、3.11 東日本大震災と福島第一原発事故、この教訓から始まっていて、エネルギーやコミュニティ、持続可能な社会をテーマに活動しているからです。環境や生物多様性という、複雑で難しい、面倒くさいと思われがちですが、そこを何とか楽しく気づいてもらえるように、いろいろな活動を通じて普及活動をしています。今、活動の中心になっているのは、今年度採択されたヨコハマ市民まち普請事業での「もろおかエコステーション」の整備です。ここでは年間約 40 種類の野菜やハーブを育てながら、できたものをエコストーブやソーラークッカーを使って調理して食べています。生ごみを分解して土を作るコンポストや、ソーラー発電を設置して工具などの電源に使用しています。自然エネルギーでこんなこともできるんだということを活動を通じて伝えています。イベント等も定期的に行っています。昨年 9 月に行った海の丘公園での幻燈会では、ソーラー発電によるグリーンエネルギーで映画を上映しました。映画の前には公園ができる前の昭和 30 年代の話を地主さんにしていただきました。大きなスクリーンに映し出された丘の風景は、みんなに大きな感動を与えました。この幻燈会は、大変好評で今年も行う予定です。昨年末にはウォームビズをテーマにみんなで集まって寄席を聞こうというイベントを行いました。町内にいらっしゃる子どもからお年寄りまで約 100 名近くが集まり、とてもあたたかい舞台になりました。これはエコステーションのテーブルに作ったモザイクタイルです。中心にある太陽と月の周りに子どもたちが作った動物が描かれています。制作には 2 か月近くかかり、子どもだけでなくたくさんの地域の人に関わってくれました。こんな風に環境という見えないインフラを通じて地球のためにアクションするという活動を地域で根ざし、たくさんの人を巻きこみながら楽しくやっていきたいと思っています。

#### <質疑応答>

(為崎委員) 「エコストーブ de 朝ごはんプロジェクト」など、非常に誰もが参加しやすい活動で面白いと思いましたが、一方でエコステーションがこれから本格的な稼働ということで、やはり固定的な場所を持つと、様々な労力や資金が必要になると思います。エコステーションの今後の維持管理等の体制や、資金面の見通しについて教えていただけますでしょうか。

(応募者) 今、借りている土地は地主さんの好意で無料でお借りしており、メンテナンスに関しては、あまりお金はかからない仕組みになっています。また、基本的にお金をかけないことも主義としています。エコステーションは、エコストーブで使う薪を拾ってくる等しております。維持管理や運営の話についても、何年か継続してやっていますので、それほど問題はないと思っています。

(為崎委員) エコステーションを運営していくにあたって、人の手が必要になる部分は今の体制で十分ということでしょうか。

(応募者) そうですね、それは十分だと思っています。

(磯崎委員) 非常に素晴らしい活動だと思います。町内会など、地域との交流はされていますか。

(応募者) 町内会とは、非常にいい関係を築いています。昨年実施した落語会でも、町内会の方から、こういう方がいるんだけど一緒にやらないかという話をいただ

いて、ウォームビズをテーマに、LEDの提灯をつくったりするなどして、イベントを実施しました。

(磯崎委員) 町内会とそのように協力できると、災害などの対策もさらに強化できますね。

(応募者) そうですね。そういう意味では今週の日曜日に、防災知恵袋という町内会の行事がありまして、そこでエコストーブでの炊き出し訓練会があり、私たちもそれに参加してご飯を炊きにいきます。防災などにも関連できていると思っています。

(川村委員) 環境だけではなく、コミュニティや災害などに関わる活動になると思いますので、そういったコミュニティの強さを今後も強調されるといいのではないかと感想を持ちました。

(応募者) そういう意味では、食や防災をテーマに、外で火を使う活動などをもしていますので、例えばアウトドアの方々なども引き込むものがあったり、私たちの活動にはそういうものがいっぱいあると思っています。どんどん輪が広がっているところが、一番やっていて楽しいことですし、委員がさっきおっしゃられたように、環境と言わないでも、地域の人が地域の食を大事にするという気持ちをもってもらえることが、一番大事な部分であると思っています。

(為崎委員) 文書での質問にありました課題のところ、今使っているらっしゃる畑は地主さん個人のもので、どれだけオープンにするかが課題と書かれていますのですが、これについて解決の道筋みたいなものはある程度描かれているのでしょうか。

(応募者) この日にはこのくらい的人数が来ますといったように、計画的に地主さんとも話をして、ゆるやかなルールを作っていくということが一番大事なことだと思っています。

#### <意見交換>

(為崎委員) 先ほど川村委員もおっしゃったのですが、いろいろなものを含んだ活動で、環境に良いということをしながらか、地域のコミュニティに踏み込んでいく総合的な活動だと思いました。一方でやはりエコステーションという場をこれから長期間にわたって安定的に運営していく体制や資金のところをもっとクリアにしていけると、今後、地域の中に空き家や空いた土地が出てきた時のモデルになっていくのではないかと感じました。

(北村委員) 本当にいろいろなことをやっていたらいいんですけども、逆に、最初の設立の経緯から徐々にやることが変わってきて、何を目標している団体なのかというのが、少し見えにくくなって、少し混乱してしまいました。まだこのエコステーションを始めたところということなので、逆にこれから何年かすると、だんだん活動の範囲が狭まって行って、ステーションをどう利用していくかというところが、もっと出てくると、さらに面白い話が聞けるのではないかと思います。

(戸川委員長) このエントリーシートの中に書いてある「地域で楽しく暮らすこと」が団体の目的なのだと思います。ですから、目的やアウトプットが多様で、新しい形のコミュニティなのだと思います。

(北村委員) そうですね。そういう意味で言うと、既存の概念にとらわれすぎて評価が難しくなってしまったところがあるかもしれません。

(戸川委員長) もし横浜市内で引っ越すのであれば、この地区かなと、思わせるような面白い取組だと思います。新しい匂いがしてワクワクしました。

(川村委員) 私も全く同じで、3.11 のことから始まって、日本中でもコミュニティを大事にしていくことが、やはり大切なんだということを認識したところがたくさんあると思いますが、そういうところのモデルとなるような活動を今後もしていただきたいと思います。

#### <採点>

### 笹下川再生プロジェクト

#### <プレゼンテーション>

私たち、笹下川再生プロジェクトは、港南区笹下で活動している団体です。笹下川は、地図上では大岡川となっていますが、私たちの地域ではみんな笹下川と呼び、親しんでいます。地域で生まれ育った方の話によると、源流から日野川と合流する地点までが昔は笹下川と呼ばれていたそうで、日下小学校の校歌にも、「ヤマユリの美しい笹下川」と出てきます。そんな身近な存在の笹下川を自然の豊かな川にするために、そしてさらに地域の人から親しまれる存在にするために、集まった有志で活動しています。私たちの活動の特徴としては、子どもからシニア世代までが関わっているため、活動の中で、自然と共存してきた生活の知恵などが、この活動の中で出されていることです。例えば、竹を使って水鉄砲を作ったり、また野草を調理して食べたり、日頃なかなかできない体験をシニア世代が先生となって教えています。活動を通して地域の中の異世代交流がなされています。私たちの活動が、地域の中で認知されてきたと実感するのが、日下地区の地区懇談会である、ひした未来カフェです。年に数回行われている未来カフェでは、日下地区の子どもから大人までが集まって、ワールドカフェ方式で日下の街づくりについて話し合いをして、新たな活動につなげています。この写真は、その未来カフェで書き込まれたシートですが、笹下川の清掃や川の学校について話題に出ている事がわかります。また、この未来カフェから日下地区の挨拶運動を推進するためのイメージキャラクターが作られました。それがこのヒッピーです。ホタルの体をしていまして、私たちの活動の目標は、笹下川にホタルを呼び戻すことなのですが、その活動の目標や意図についても地域に浸透していつているということが、これを見て分かっていたいただけるかと思います。自然に対する活動が、一部の人だけで行われていても、効果が少ないとは思うのですが、こういった私たちの取組のように地域に浸透していて、多くの人が活動に参加できるようにすることによって、川への関心が地域全体に浸透して、自然を大切にしようという意識が広がり、環境を良くしていくと同時に、地域への愛着も育まれていくのだと思っています。私たちはこれからも幅広い世代の人が関わられるような活動を続けていきたいと思っています。

#### <質疑応答>

(為崎委員) 川の学校の中で、水質調査をする時に生物多様性について講師の方がまず説明をしてから行っているということなのですが、逆に言うと、調査結果を受



けて、また改めて講師の方が解説をすとか、あるいはその結果について経年分析を行うといったことはされているのでしょうか。

(応募者) 講師の先生が生き物を見ながら説明をしてくださるときに、今のところ数やグラフといったものでは出していない状況です。ただ、どのような生き物がいたかということは必ずチェックして、笹下川再生プロジェクト通信というのを地域に配布しているんですが、そこに種類等を記載するようにしています。

(北村委員) この生物多様性に関する取組の欄に、すごくしっかりと書かれていて、ものすごく熱心にやられているという風に思っています。まず調べるところを中心にできていると思いますので、そこから先、何か今後もう一工夫できたら面白いと思いますので、そういったところで今後何かやっていきたいことがありましたら教えてください。

(応募者) 継続的に、例えば清掃時に川に入った時にも生き物がいるということは確認しているので、そこまで含めてどのような生き物が笹下川にいるのかということをもう少し情報発信をしていきたいと思っています。

(北村委員) 生き物がいるということを確認するだけでなく、どう守っていくかというところもまたぜひ頑張ってくださいと思います。

(応募者) そうですね。理解を深めて情報発信等をしていきたいと思っています。

(川崎委員) クリーンアップをして、それでどれぐらい川の質が良くなるかとか、そういう計画的なものは、どうお考えですか。

(応募者) カワニナ、ホタルが生息するために必要なのはその地域の明るさなども関係ありますし、生息するための土が必要だったりするのですが、清掃活動によって水質がどれだけ変化してきたかというのは、正直それほど大きく差は出ていないところです。ただゴミの投棄が減ってきたというのはあります。今度護岸工事が入ることになりまして、その護岸工事の際に、どのようにすれば、もっと自然が豊かになってホタルが戻ってくるのかということ、他の川に見学に行って調べる予定となっています。

(磯崎委員) 今、ホタルはまだいないのですか。

(応募者) はい、残念ながら、いません。上流にはカワニナも生息していて、氷取沢の方にホタルが出ているという話は聞いています。

(北村委員) このカワニナの餌となるクレソンをとということですが、クレソンは外来種に指定されています。配慮が必要だと思います。

(応募者) はい、すみません。まだ植えていません。

#### <意見交換>

(川村委員) 河川が対象で、やはり上流から下流に流れてくるものなので、いろいろとやっても、上流がどうなっているかによっては、なかなかきれいにならないということはあると思います。ですから、いかに上流下流のコミュニティと一緒にやっていくのかということになると思います。そのような点について質問も出ていたと思いますが、まだちょっとそこは弱い感じがします。今後はそこを期待したいと思います。

(為崎委員) まず一つは、体制面ではいろいろな人を巻きこみながら内部の体制もうまく循環しているというところが評価できると思いました。非常に熱心にやって

らっしゃるのですが、川村委員のコメントと同じで、結果の分析など、もう少し体系だっけ行くと、効果もしっかり見えるし、そういった措置を打ち出すことで、より理解が深まるのではないかと思いますので、少しもったいない印象を受けました。

(川崎委員) どうしても生物多様性の賞の選定が頭にちらついてしまって、恐らくそのことを抜きにして考えれば地域の方もたくさん参加しているし、素直に皆さん環境や地域の自然を愛されて、熱心にやられているとストレートに評価できると思います。ただ、生物多様性として見るというところと、いわゆる一般の環境活動賞という点で見るというところで、私の中でいろいろと複雑な思いを持ちながら評価をしています。

<採点>

### 南中あじさい咲かせ隊

#### <プレゼンテーション>

資料等で提出した通りでございますが、強調したい点を若干述べさせていただきたいと思います。まず、南中学校で平成22年に全国環境緑化コンクールで準特選の表彰を受けまして、その時あじさいをたくさん増やしていたわけですが、今はそれを大体50種、校内には1,500株、また地域の中に500株ぐらいで約2,000株のあじさいが育ってきています。将来10年くらいかけて八景島あたりのあじさいロード並みに2万株のあじさいを増やしていきたいと計画しております。そのような中で、今までの活動の中でわかってきたことは、昨年南中学校が創立70周年だったのですが、敷地内の土壌から瓦礫等が出てきたりするなど、土壌の状態にもものすごくばらつきがあることがわかりました。また、京浜急行の土手にプランター等を置かせていただいて世話をしているのですが、あじさいに限らず地域の土壌に合ったものを増やしていきたいと考えています。今年は学校の好意で倉庫やビニールハウスを設置して使わせていただいております、それを利用して種からいろいろな草花を育て、あじさいのみならず増やしていきたいと考えております。

#### <質疑応答>

(磯崎委員) あじさいは管理が大変じゃないですか。

(応募者) はい、そうですね。

(磯崎委員) 中学生だけと連携しているんですか。先生も活動されているんですか。

(応募者) あじさい先生と言われるぐらい詳しい方が以前、園芸部の担当部長でいらっしゃいまして、その方は、オランダのコンクール等で入賞した、「未来」という真っ赤な花が半年間ぐらい色を変えながら咲くあじさいをたくさん増やされました。栽培や剪定等、いろいろな作業がありますが、挿し芽は生徒さんの方が非常に上手なので、やっていただいて、また放課後、当番で生徒さんが水やりをやっていきます。除草や穴掘りと等はボランティアでやっていきます。

(戸川委員長) 中学校の生徒さんから何かアイデアが生まれたというような事例がもしあったら教えてください。

(応募者) まず、水やりから始まったんですが、先ほど申しましたあじさい先生と言われる女性がいらっしゃって、その先生が転勤になられましてから部員も減って

夏の水やりに困ったわけです。それでボランティアを組織しまして、南中学校を学区としている自治会4つの連合自治会の方々に呼びかけまして、組織しました。最初の頃は、南中学校の生徒さんから、最近夏休みになると変なおじさんたちが来るのよね等、言われていたんですが、今ではもう、皆さんと顔見知りになって、必ず挨拶をし、街で会ってもそういうことができるというような関係になりました。ですからあじさいを育てることも大事なんです、知り合いになれるということで育てる人を育てていこうということも意識しながらやっております。

(為崎委員) あじさいが町の中にもたくさん咲いていらっしゃるようですが、生徒や街の人がそのあじさいを見た時に、綺麗だと思うだけで終わらず、環境は大切だと思うようになるというような、変化みたいなものが感じられたことがあったら教えていただけますか。

(応募者) 成果があったと思うことの、まず第一点は、街の中であじさいがたくさん増えたという事です。第二はゴミの投棄が減って、街の環境がきれいになりました。三番目には、京浜急行の土手が雑草だらけだったんですけれども、そこにプランターを30個ほど置かせていただきました。その横の道を通る方々が、あじさいをみながら歩き、我々が世話をしているとご苦労様とかそういった会話まで生まれてきて、いい空間ができてきたと感じております。

(為崎委員) きれいねとかご苦労様と云ってくださる方が、あじさいを育てる仲間に入ってくるということもあるのですか。

(応募者) それを願っておりますが、1回来て、1回きりという方もいらっしゃって、出入りが激しい時もありました。今の課題は、仲間づくりとっておりますので、考えていきたいと思っております。

(北村委員) 活動を今後、あじさいだけに絞ってしまうと、仲間が増えていきにくいのではないかと勝手な心配をしていましたので、どう輪を広げていくのかということをお聞きしたかったのですが、まさにそれが課題だということでした。

(応募者) この間、横浜市地域緑化活動支援助成金の交付を受けた団体の発表会があった時に他の団体がやられていることで、我々もこれならできるんじゃないかと思われるいろいろなヒントがありましたので、それを実践していこうかと思っております。

#### <意見交換>

(川村委員) 私は逆に、あじさい博士がいて、そういう人からノウハウを伝承されてきて、それであじさいの里という街づくりをしていくんだというところは、それはやはり後々非常に大きな財産にもなると思うので、どんどんいろいろなものに広げていくというより、そこはやはり抑えながら根っこはちゃんと守っていく方がいいと思います。また、中学生の活動が、なかなか私たちには見えないので、見えるような形での広報をしていくといいかと思っております。

(北村委員) 私の発言の意図としては活動の幅を広げてくださいということではなく、このあじさい一筋でどうやって人を巻きこんでいくのかということ、今後の活動で検討していかないといけないのではないかと思ったということが一つです。その他、少し気になったのは、夏休みの間に水やりボランティアと中学

校の園芸部とで交流が出来てくると良いのかなと思います。

(為崎委員) 活動としては、あじさいを軸にいろいろな人が入ってきたり、コミュニティが出来たり、というのはわかるのですが、そのあじさいを育てて街を美化していくというところが、環境活動の成果としていいのかというところは、迷う部分がありました。ご専門の方にその辺を教えていただければと思います。

(川村委員) 環境というものをどういう風に捉えるのかということで、評価も変わって来るかと思いますが、これが環境でこれが環境ではないと判断することはなかなか難しく、その地域が持続可能でコミュニティがきちんとしっかりしているということが大事で、その中に環境が溶け込んでいるということが、今後は大事になってくるのではないかと思います。あじさいは最初のとっかかりで、コアになる人がいて、その人のノウハウや知識などが、伝承されていって、そこから環境も取り込んだ意味での、地域活動になっていくということも、地域の持続可能性を高めるということになるかと思いますが。先ほどゴミの廃棄が減ったと出てきましたので、そこは注目すべきかと思いますが。

(戸川委員長) 意識改革が地域の方に生まれてきているということだと思います。それは、大きな環境への影響だと思います。

<採点>

#### **特定非営利活動法人 NPO ブルーアース**

##### **<プレゼンテーション>**

私たちは約5年に渡り、エネルギーと環境に関する講座「エネルギー&エコロジーセミナー」を開催する活動を行っております。今回、このセミナーの特徴についてご説明いたします。まず、このセミナーは、市民の皆様エネルギーと環境問題について、より正確な知識を体系的に把握していただくことを目的としております。全4回ないし、5回の講座のシリーズで成り立っております。その最終回には、講座に関連する施設見学会が含まれております。これは市民の皆様独自の目線でこの問題と取り組んでいただきたいと考えているからであります。次に、このセミナーの講師陣は、長年企業で培ってきた豊富な知識や経験を地域の皆さんへ還元しようと、誰にも理解できる講座をモットーに取り組んでいます。セミナーは全て私どもの手作りで計画、運営、報告書提出まで確実に責任をもって実行しております。これは、他に類を見ない強みと自負をしております。アンケート結果では、参加者の皆様から、わかりやすいという評価をいただいております。3点目は、セミナー参加者の最近の1年半の実績では、平均年齢が68歳ですが、皆さん、積極的にエネルギーと環境の知識を習得しようとの意欲が高いことがわかりました。リピーターが約3割あることから、セミナーの内容に強い関心を持たれている結果であると思います。最後に、人生100歳の時代に突入して、セカンドライフ、サードライフをいかに過ごすか、開催してきたセミナーを通してまだまだ学びたいと考えておられる方々の多いことがわかりました。今後ともその場を提供させていただき、人生100歳の時代と一緒に共感していただけることを私たちNPOブルーアースのこれからの最大の使命と考えております。老いてますます、エネルギーと環境をキーワードに社会貢献を目指していきたいと考えております。

### <質疑応答>

(為崎委員) 今のご説明の中で参加者がけっこう高齢だという話があったのですが、若い人が来ない理由をどう分析されているかと、今後、取組をどう考えていくかというあたりをお聞かせいただけますか。

(応募者) 正確に言いますと、平均年齢が68歳で、40代の方もみえています。年齢構成は、70歳以上の方が62%、60歳代の方が21%、50歳代以下の方が17%、ということで、60歳以上の方が8割を超えますので、高齢化になっているとは言えると思います。

(為崎委員) 質問したのは、子育て世代や子ども等、次の世代につながっている世代が、関心をもって来てくれると次の代につながるかと思ったので、そのあたりの世代への取組を今後、視野にいれてもらっしやるかどうか、関心があったところ です。

(応募者) 横浜の県民センターのミーティングルームで、このセミナーを開いております。そのミーティングルームを我々の希望スケジュール通り、例えば5回連続で土・日曜日を取るとすると、なかなか競争率が高くて取りにくいので、どうしても平日の18時以前の時間で部屋を取らざるを得ない状況があります。そうすると、現役の方がその時間にはなかなか来られにくく、また、今おっしゃった主婦の方々もその時間に来るのは現実的になかなか難しいです。結果、我々のような年齢が高い方がどうしても多くなってしまいうのが現実です。若い人がダメだということではなく、結果的にそうなっています。なお、このセミナーだけではなく、もう一つ小学生、中学生を相手にした理科教室もやっています。始めてから、5、6年経ちますが、累計で行くと約7,000名近くの小学生、中学生に理科教室をやってきました。このような形で、日本の科学技術を伝承するような意識づけをしていこうという活動をしております。また、今年度から、これは横浜市ではないのですが、県立の川崎図書館と新しくプロジェクトを進めています。これは、学び直し教室というテーマで、若い方からお年寄りまでの多くの市民の皆さんに来ていただくという事で計画を進めています。

(磯崎委員) エネルギーと環境の講座内容について基本方針はありますか。

(応募者) 私ども、基本的にエネルギーと環境というのは切っても切れない関係だという風に思っています。そういう意味で並列してやるようにしているんですが、皆さんエネルギーにしても、環境にしても、莫大的な知識、情報が耳に入ってきている状況で、それに対して我々が狙っているのは、体系的に、エネルギーとは何か、環境とは何かという基礎的な情報から、現状はどうなっているのか、技術的な取組はどうなっているのか、応用や利用、課題、今後の展望などまでをだいたい4回から5回シリーズで網羅しているというスタンスで、取り組んでおります。

### <意見交換>

(戸川委員長) 私は、このブルーアースさんにはすごく可能性を感じていて、プロフェッショナルな集団であると思っています。ただ、今のところアウトプットがセミナーだということなので、今後、例えば何か活動している人たちが専門的な知識が欲しいときに、相談窓口のような相談できるような仕組みが作れると、相

当面白いものになっていくと思います。そういった NPO で動いている専門集団はあまりないので面白いとすごく思いました。地域との関わりのところを書いてありましたが、他団体との交流が始まっている、とありますので、そこは期待できる点かと思います。

(川崎委員) 専門知識をお持ちで、貴重な人材でいらっしゃると思います。でも私も長年教育に関わってきました難しいと思うのは、専門集団です、と旗をあげても、すぐにじゃあ教えてくださいとは、なかなかいかなくて、やはり一緒になって、何かをやっている中で、周りからあそこは頼れる、専門的な人がたくさんいると認められていって確立していくというプロセスがあると思います。そういうステップをまだ踏み切れていらっしゃるなくて、すごく可能性はあるのだけれど、このままの形だと、せっかく持っている潜在的なポテンシャルを活かせない気がしました。

(為崎委員) 全く同じ意見ですが、恐らくとても体系的に学べる専門的な講座なので、意識の高い方が来られると思うので、講座だけではなく、その方たちが環境活動に向かって動き出そうとする、実践のところまでもう一步踏み込んだ支援があると、すごく成果が上がって来ると思いました。

(川村委員) 為崎委員が言われたように次の活動にいかに結びつけていくのかということは、やはり考えていく必要があると思います。もう 14 年もやられているので、ぜひ次のステップとして、授業をするといった意味を超えての社会への還元ということを考えていただきたいと思いました。

(北村委員) 皆さんと同じ意見ですけれども、今後、どういう風にされていくのかということで、内容が、毎年似たようなことをやっちゃっているというのが、少し気になっていまして、最初の初歩の講座と併せて、それに興味を持った人たちが、もう一步次のものを得るための講座みたいなものを新しく立ち上げていくと、変わってくるのではないかと思いました。せっかくなのでもったいないと思いますので、講座に来る人たちを次に引き上げるような別の講座などを立ち上げていくのも一つかと思えます。

<採点>

### **横浜市地球温暖化対策推進協議会**

#### **<プレゼンテーション>**

我々の協議会は、産官学及び民が一緒になって、主に横浜市内の地球温暖化対策の実践に向けてとにかくいろいろなことをしようという、そういう団体でございます。私どもは、まず各区の区民祭り等のイベントに年間約 20 回程度出ていまして、また風車の見学会や道志村の見学会等も実施して、年間 1 万人程の一般市民の方に働きかけをしております。プロジェクトを作って、プロジェクトのメンバーがその活動にあたっています。今度新しく始めました太陽光発電普及キャンペーン 2020 は、オリンピックの年までに、二酸化炭素を具体的に減らしていこうという活動で、力を入れてやっております。今年は太陽光発電 3kw を 100 軒つけて、合計 150 トンの二酸化炭素を減らそうという目的を持ちました。これは、実際つけられないだろうと思っていた古い家のカーポートの上に太陽光をつけたという事例です。結果として 300kw 分の

設置ができて150トン削減ができました。続きまして、今度は大学生と企業のマッチング会というのを今年から始めました。企業の課題に対し、大学生が提案するという事業でございます。実際に、日産の課題提起に対し、横浜国立大学でカーシェアリングができるのではないかとということで、現在調整をしております。最後ですが、自治会と協力し廃食油の回収をしております。最初は、5か所の自治会から始まったのが、現在港南区だけで21か所となっております。全体では約40か所で回収が始まりまして、できれば、廃食油の発電にもっていきたいと思っております。ただ、新しい仕組みを作るのに半年から一年かかりますので、地道に関係者と調整して、何とか実現したいと思っております。

#### <質疑応答>

(北村委員) 最初、横浜市が発足したというところから、自分たちの手に渡ることになった経緯と、それから先、今どういうモチベーションでやられているのかというところを教えてください。

(応募者) 最初、横浜市が審議会として協議会を作りました。そこに最初から、ソフトエネルギープロジェクトという団体で参加させていただいていたんですが、やはり発電だけでも二酸化炭素は減らないということで、会長が平成18年に行動する協議会にしようよ、ということで、学校の授業や、区民祭りなど、イベントに参加し始めました。そういった活動をしていくうちに、事務局が横浜市から私どもNPO法人に移行されました。今の時代、これからどうなっていくのかということを考えたら、とにかく地域でやれることを市民に伝えていこうということで、活動しています。市が提案してくるのではなく、全部こちらが企業や大学、学生などと相談して進めており、庁内の調整と記者発表は市が行っています。基本はとにかく温暖化に向けてできることをいろいろとやっていこうというのが、モチベーションです。もちろん温度は高い、中ぐらい、低いといろいろとありますけれども、向いているベクトルは基本的にそこでそろっているとお考えいただければと思います。

(川村委員) 市民活動としては、スケール的にはかなり大きいと思います。その成功の秘訣みたいなものを伺いたいと思っております。もともとの審議会が、単に議論するだけではなくて、活動する審議会という形に変わっていったということですが、他にも市民活動のスケールを大きくするためのヒントみたいなもので、日常的に思っていることはありますか。

(応募者) 担っているメンバーに、市民団体が14団体も入っています。そうすると、我々は生活者なので、立派なことよりも、市民ができることを伝えていくということを考えています。温暖化を防ごうと思ったら、市民だけでもできない、行政と、企業も59団体いるので、企業の力も借りて、お金も出していただいて、実施運営に近い形で、市のお金も補助金としては出るけれども、自分たちで運営もやっていくんだということでやっています。協議会は、自分が何かをするのではなくて、企業や理事会、学生、大学などのやりたいところをつないでコーディネートしていく、そして仕組みが大きいので、大きいところでできた仕組みを地域のみんなが使っていけるようにするのが協議会の役割だと思っております。

#### <意見交換>

(為崎委員)いろいろな団体や学校、企業などをつなぐ役割をしているというところで、協議会という、名ばかりになってしまうことが多い中で、いろいろなところがつながるように、うまくその機能を果たして進めていってほしいなと思いました。そういう意味では新しいケースかと思います。

(戸川委員長) 企業から社会課題を出して、それに対して大学生が提案をするという「大学・企業・団体課題解決マッチング会」というのをやられていますが、こういうことができる大きさを持っている団体というのは、ちょっと他にはないと思います。そういった、なかなかできない中間支援組織という役割を担っていくのではないかと、すごく可能性を感じています。

#### <採点>

### 緑園地区活性化委員会 緑園子ども見守りプロジェクト

#### <プレゼンテーション>

私たちが住んでいる街、これが緑園です。非常に整備された街です。まだ、街ができて30年、非常に若い街です。その中で、平成26年春、フラワーポットの花植えを行いました。これは、子どもたちが花をこのフラワーポットに植えているところです。できた花はこのような形になりました。ブルーサルビアや、日々草、マリンゴールドなどいろいろな花です。そしてプレートをつけました。このプレートには番号もついています。こちらを見ていただくと、横についているのがわかるかと思います。それを地域の方々がみんなで、各プロジェクトに参加の家庭にお配りいたしました。子どもたちが学校で小さいポットで、花を一生懸命育ててくれました。苗と言っても本当に子どもの小指のような、ちっちゃい苗です。これを約1か月間、学校で毎日水をあげたり、それから日陰にならないように、一生懸命育てていただきました。去年の秋には、ビオラの花芽を子どもたちが植えました。そして、大きくなった花をまた地域の方々に配りました。子どもたちはこの活動をどう思っているのかと私たちも感じているところなのですが、子どもたちが作文にしてくれましたので、その作文を一説読んでみたいと思います。「私は地域の方に喜んでもらえるお花になるように一生懸命お花を育てました。例えば、最初はお花を一本だけ残して他のお花を全部切ってしまいました。私は綺麗に咲いているお花を切ってしまうのは、少し悲しい気持ちでした。でも、それは残しておいたつぼみにたくさん栄養がいくようにするためだったので、切って良かったなあと思いました。毎日一生懸命水をあげたり、話しかけたりしました。それを続けているうちに地域の方にお花を渡す日がやってきました。私ははじめ、ずっと育ててきたお花を渡すのはとても嫌でした。でも、お花を渡すことによって私たちのことをもっと見守ってもらえるということを思うと私はとても嬉しくなりました。私は登校、下校でビオラの花を見つけると、ちゃんと育ててくれているんだなと心が温まります。」このような作文を子どもたちに書いていただいて、私たちの活動を見守ってくれているんだなと思っております。

#### <質疑応答>

(為崎委員)花と見守りというのは地域の繋がり作りにはとても面白い取組だと思いますが、花を育てていく中で、子どもたちが切るのがかわいそうだなと思ったという作文がありましたが、この活動を通して、子どもたちの自然への意識が変わっ



て、行動が変わったという、そういった効果などがあつたら教えてもらえますか。  
(応募者) 東小と西小の子どもたち約 130 名の方が参加してくれているのですけれども、学校でもよく朝顔を育てるといっているのをやっています。ですが、できた苗を切ったりだとか、花がある程度咲いたら、またそこで切って、それをもっと大きくするという授業はあんまりないんです。ですから、学校の先生の方が「本当に花を切っちゃっていいんですか？」と言われるような感じで、子どもたちも、作文にもありましたように、最初はおっかなびっくりなんですけれども、こういう風にして花っていうもの、緑っていうものは、どんどん大きくなって強くなっていくんだな、ということが学びとれたと思います。

(為崎委員) あわせて、保護者の方たち、お父さんやお母さんの親の世代も、そこからの気づきがあるんだと感じられることはありますか。

(応募者) 保護者の方は、子どもたちが花植えをする時に、アシスタントという形で PTA の方に数名、参加していただいております。普段、家庭で子どもが花を育てるといようなことをあまりしないようで、子どもさんがこの活動で土に親しんでいるといったところを見て、非常に助かっている、というような言葉をいただいております。

(戸川委員長) 置いているポットの数は、年々変わっているのでしょうか。増えたり減ったりしているということでしょうか。

(応募者) 置いているポットの数は、今 190 になっていますけれども、3 年前の最初は 90 ぐらいから始まっております。これ以上増えていきますと予算的なこともありますので、たくさんは増やせません。ただ、このポットを見て、ご近所の方が私も参加してみたいというようなご希望があると、数個ずつ、予算の許す限りご協力していただいて、参加するご家庭が増えているといった状況です。

(川村委員) ポットでお花を育てていくのを子どもと一緒にやっているということなんですが、団体の名前に見守りとお書きになられているわけですから、なにか背景となる理念みたいなものがあるのでしょうか。

(応募者) 子どもたちが、災害や事故に会う機会が非常に多くなっております。私たちの街の中では、お陰様でそういった大きな事故はないのですが、近隣で、交通事故もありましたので、それも含めた形で子どもたちにも意識を持ってもらおうという活動をしております。

#### <意見交換>

(為崎委員) 位置づけとして見守りの手段として花があるという印象が強くて、結果的にその花が地域の中にたくさん入って来るといのは、環境が良くなることではあるのですが、この見守りというところに軸足がある活動であると感じました。今後はもう少し環境も意識し、その部分が厚くなると良いのではないかと思います。

(戸川委員長) せっかく見守りについているので、どんな効果があつたのか知りたいと思ったのですが、恐らく、何にも事件が起きていないのが効果なのかと思ひまして、これも大変面白いと思ひました。まだ見えてきていませんが、ポットがあるところは、見守りの事に関しては、理解がある場所、家庭だという事がもしか

したら子どもたちの中に意識が醸成されているかもしれません。そのように、うちは何かにかう活動してますよというサインになって来るのだと思いました。  
(為崎委員) 見守りは、ふらっと立っているだけだと逆に怪しげになるかもしれないのですが、その時に花となると、大変雰囲気が和らぐし、子どもの登下校の時間に、何気なく花の世話をしながら、街中に人がいて、さりげなく見守るというのはとてもいいと思います。それをうまく活用して、子ども 110 番の目印の代わりに花があるというように、なにかうまく花を使って、広げていただけるといいかと思いました。

(戸川委員長) その目印だということを理解している人が町を歩くと、あ、ここも、ここもなんだと思えるところが素晴らしいと思います。小学校の子どもたちがそれを覚えているとすれば、もし何かの時には、駆け込める、なんてことを考えると、見守りと言ってもいいのではないかと感じています。

#### <採点>

### 3 生物多様性特別賞審査

(戸川委員長) では、生物多様性特別賞の審査に入ります。事務局は、事前審査の結果を報告してください。

(事務局) 事前審査における生物多様性特別賞への推薦は、笹下川再生プロジェクトが4票、横浜海の公園ライフセービングが1票、該当なしが2票となっております。

(戸川委員長) では、審議をいたします。ご意見をお願いします。

(為崎委員) まず、具体的な審査に入る前に、判断の基準について迷うところがあります。応募者の中からベストを選ぶという相対的な判断もありますし、そうではなく、生物多様性特別賞という絶対的なものの基準に達しなければ、今回該当なしという判断もあるかと思います。そのあたり、どのレベルならば、生物多様性特別賞にふさわしいかと言われた時に基準がよくわからない部分がありまして、ご専門の北村委員に生物多様性特別賞の受賞対象としての適性みたいなものが何かあればご意見いただきたいと思います。

(北村委員) 今、生物多様性という言葉が、ものすごく新しい言葉になっていまして、審査の過程で見ていると、やはりこの生物多様性という言葉、概念が、まだまだ浸透していないと思っています。そういったことを含めて考えると、本格的に生物多様性を実践している人だけを評価する、表彰するというのは、まだまだもっと先の時代なのではないかと思っています。そういった意味では、こういうことも生物多様性なんだよ、こういう風に評価ができるよ、ということを我々の方で出していく段階であると思っています。今回、生物多様性特別賞としては、何も書かれていないところもありましたし、物足りないところも多かったというのが、正直な感想なんですけれども、その中でも、こういうのも取組なんだということを、私たちの側からメッセージを出していく機会であると思っています。

(為崎委員) ありがとうございます。非常に現状がよくわかりましたし、改めて生物多様性特別賞の活動例で挙がっているものをみると、非常に幅広いものも挙がっ

ているので、そういうことを考えれば、生物多様性を推進していくという意味でも、今、北村委員がおっしゃったように該当するというものを積極的に検証していくのが良いと思いました。

(戸川委員長) みんなやっていることなんですけれども、生物多様性をうまく定義できなくて、うまく表現できないという人が多いというのをすごく感じます。

(川村委員) 生物多様性は、今や国際的にも議論されているテーマでありますけれども、身近な私たちの生活の中で、実体験として考えていくときに、どういう風にかみ砕いていくのか、という事でヒントを出せるような活動であれば、受賞対象になるのではないかなと思います。生活の中で、動物や昆虫と共生していくという視点を養う活動は、生物多様性につながるという風に考えて、広く受賞対象を認めていいという風に思います。

(川崎委員) 今回、推薦があったのは、笹下川再生プロジェクトと、ライフセービングクラブということで、大変悩ましいと思っているのですが、笹下川再生プロジェクトは生物多様性のことに大変意識が高く、取り組んでいらっしゃるんですが、まだ、努力途中のようなところも見受けられます。一方で、ライフセービングクラブは、生物多様性の視点は大変薄かったと思うんですが、ただ、お話を聞いてみると、意識してるかしないかに限らず、生物多様性の面でも、かなり踏み込んでいらっしゃるというところが見られて、そういう意味ではある意味、書面での書きぶりは違いますが、実体的には同じレベルのように感じていて、悩ましく思っています。

(川村委員) 私は笹下川再生プロジェクトの方を推薦させていただきました。理由としましては、ホタルが飛ぶ綺麗な川を取り戻すということが目標であるという点と、魚や昆虫、人間の共生を図っていくために私たちはどうしたら良いのかということ、実体験として住民や子どもたちが学習できる活動をしているという点で生物多様性特別賞にあてはまると考えています。

(磯崎委員) 今、ご意見がありました。生物多様性としては、笹下川再生プロジェクトの取組がふさわしいと考えています。

(北村委員) 私はライフセービングクラブに投票させていただきました。委員が生物多様性特別賞に関する事を皆さんに問かける場というのはなかなかないので、こういう場を借りていろいろな議論をし、皆さんに聞いていただきたいと思っていました。そうした中で笹下川再生プロジェクトさんは、すごく多様な取組をされているので、正直私が入れなくても誰かがあげてくれるだろうと思ひまして、他にもっと掘り下げるところはないのかという視点で探しました。そうすると、ライフセービングクラブは、環境を目指した団体が始めたのではないというところがすごく面白かったので、その面白さを取り上げたくなったということと、今回、ライフセービングクラブでやっているのが、ただ単に、多様です、ということを見せるだけでなく、実験をしながら、みんなに海の浄化作用とはこういうものなんだよという生態系の機能に関するようなもの、生物多様性があるとどういったいいことがあるのかということまで具体的に見せているというところが、面白いと思いました。また、もう一つ大事な理由がありまして、笹下川再生プロジェクトさんは、先ほど誤解は解けたので大丈夫なのですが、応募書類

の書面だけで見ると外来種を使おうとしていましたので、これに賞をあげるわけにはいかないと思いました。その誤解が解けたので逆に迷いが生じてきてしまったというところですよ。

(戸川委員長) 生物多様性を考えるときに本当に重要なポイントですね。審査員の方も考えないといけないし、事務局の方も応募があった際に考えなければいけない点であると思いました。

(為崎委員) 今回、生物多様性特別賞に関しては、とても悩みました。正直、特別賞というレベルに達しているかどうかというところで迷いましたが、先ほど、とにかく発信をする意味でも広く表彰していこうということで合意がありましたので、私は今出ている2者の中では笹下川再生プロジェクトの方を推薦したいと思えます。意識していなくても結果的にそうなっているという活動もあると思うのですが、やはり表彰した時に意識をしてやっているところを表彰した方がより前に進むのではないかと思います。笹下川再生プロジェクトは、はっきりと打ち出していらっしゃって、記載も生物多様性のところをかなり書き込んでいただきましたし、まだ途上とはいえ、成果もあげてきているので、こちらの団体を推薦いたします。

#### <投票>

#### 4 第25回横浜環境活動賞受賞候補者の決定

(戸川委員長) 受賞候補者の決定を行います。はじめに、児童・生徒・学生の部について、事務局から集計結果を報告してください。

##### (事務局) 採点結果を表示

(戸川委員長) 審査基準に基づき、2団体とも15点以上ですので、実践賞の候補とします。

(委員) 異議なし

(戸川委員長) 次に大賞候補です。審査基準により、点数が一番高い者が大賞候補となりますので、最高得点の横浜市立三保小学校を大賞候補とします。

(委員) 異議なし

(戸川委員長) 次に企業の部の結果をお願いします。

##### (事務局) 採点結果を表示

(戸川委員長) 2企業とも15点以上ですので、全て実践賞の候補とします。

(委員) 異議なし

(戸川委員長) 大賞候補は、最高得点の株式会社ファンケルとします。

(委員) 異議なし

(戸川委員長) 次に、市民の部の結果をお願いします。

##### (事務局) 採点結果を表示

(戸川委員長) 15点以上の6者を実践賞の候補とします。

(委員) 異議なし

(戸川委員長) 大賞候補は、最高得点の横浜市地球温暖化対策推進協議会とします。

(委員) 異議なし

(戸川委員長) では、生物多様性特別賞の集計結果をお願いします。

	<p>(事務局) 笹下川再生プロジェクトが6票、横浜海の公園ライフセービングクラブが1票です。</p> <p>(戸川委員長) では、生物多様性特別賞の候補は、笹下川再生プロジェクトとします。</p> <p>(委員) 異議なし</p> <p>(戸川委員長) これですべての審査を終了しました。何かご意見があればお願いします。ないようですので、以上で議事を終了します。事務局に戻します。</p> <p>(事務局) 委員並びに応募者の皆様に、ご連絡させていただきます。本日の会議録については、公表となります。後日、ご確認いただきますので、よろしくお願いたします。また、受賞者の皆様の応募書類につきましては、募集概要に記載しておりましたとおり、規約・定款、役員名簿、収支書類及び個人情報を除いて、ホームページに掲載させていただきます。ご了承くださいませよう、お願いいたします。</p> <p>続いて、今後の予定について委員の皆様にお伝えします。お配りしました「第25回横浜環境活動賞今後の予定」をご覧ください。本日の審査委員会の審査をふまえて、市長が受賞者を決定します。詳細については、別途ご連絡いたします。よろしくお願いたします。事務連絡は、以上です。</p> <p>審査委員の皆様並びに応募者の皆様には長時間にわたるプレゼンテーション及び審議をいただき、ありがとうございました。以上をもちまして、第25回横浜環境活動賞審査委員会を閉会いたします。ありがとうございました。</p>
資 料	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 次第</li> <li>2 資料1 横浜環境活動賞審査委員会 委員名簿</li> <li>3 資料2 横浜環境活動賞実施要綱</li> <li>4 資料3 横浜環境活動賞審査委員会運営要綱</li> <li>5 資料4 審査基準 (市民の部／企業の部／児童・生徒・学生の部／特別賞)</li> <li>6 資料5 応募者一覧 (プレゼンテーション 発表順)</li> <li>7 (参考資料) これまでの受賞者一覧</li> </ol>